
短編集

愛・武者修行Lv 1

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集

【Nコード】

N5156BA

【作者名】

愛・武者修行LV1

【あらすじ】

いろいろな作品を集めた短編集です。

落ちる、ひたすら落ちる。

ゆらゆらと揺らめきながら、地上へと。

乗った時は、まさか落ちるなんて思わなかった。

地面が迫る。

3、2、1、激突!!

地上では、心配そうな家族が見守っていた。

「大丈夫だったかい？」

「うん。落ちるとは思っていなかったけど全然問題ないよ。また、乗ってくるね」

彼はそう言うともた木に登りだした。

「桜の花びらに乗って下りてくるなんて家の息子はなんて勇者なんだ。蟻一族の誇りだな」

／蟻のお遊び

2

僕は召喚士だ。

でも、まだまだ半人前だ。

いつも自分が召喚したいものとは違う生き物を召喚してしまう。

この前は竜を召喚しようとして、タツノオトシゴを召喚してしまった。

その前は恐竜を召喚しようとして、トカゲを召喚してしまった。

「今度こそ、成功させるぞ、ソレ」僕は隕石を召喚した。

んん？ でかいでかすぎるよ隕石。今までは小さい物しか召喚できなかつたのに……。

巨大隕石は惑星を粉々に破壊した。

／成功の悲しみ

「うわっ俺、体温低っ！ 尿も赤いし、やべー」
ああ、そうか俺ロボットだった。
赤いのはトマトジュースか、てへっ。

／勘違い

山の中を歩いていたら、オシャレなレストランが目に入った。
私は近くまで行ってみた。

玄関には「従業員募集」の紙が貼られていた。

私はレストランというものに興味があったので、応募した。即採用になった。

「じゃあ、さっそく働いてもらうが、まずは原料調達からだ」店主が不気味に笑って言った。

「何を、仕入れてくればいいんですか？」

「人間の死体だ。うちは人間の死体を料理に出しているのだ」

「ええー、どこで死体なんて手に入ればいいんですか？」

「決まっているだろ、殺すんだよ。できないっていうなら、お前を料理の材料に使うことにする」

「私を殺すつもりですか？」

「そうだ。今までもそうやってここに来た人を殺してきた」

「あなた殺人鬼なんですか、奇遇ですね。実は私もなんですよ」
意気投合した二人はその夜、仲良く殺し合いをした。

／導かれた二人

街がクリスマス一色に染まるイブの夜、サンタクロースはプレゼントを世界中にばら撒いた。

子供達は自分が願った物をもらえて、サンタさんにとっても感謝した。

ただ皆、忘れていたのだ。サンタも人間だということ。
そのプレゼントを配ったサンタは極悪サンタクロースで、人々の
プレゼントに小さな爆弾を取り付けた。

ホワイトクリスマスは、極悪サンタによって黒く塗りつぶされた。

ノブラッククリスマス

攻撃しろ、もっと早く、敵がどんどん攻めて来るぞ。

敵はどンドンやって来る。敵の数は不明だ。

なんで俺の所ばかり攻撃するんだ。

こちらの攻撃はびくともしない。数が多すぎる。

なんて、行列だ。これじゃ、いくら俺でも商品を捌ききれないぞ。

ノレジ打ち

突如復活した、巨人。

巨人はすぐに人間をその圧倒的パワーで支配した。

家畜化された人間は巨大な水槽に入れられ、食料やオモチャとして利用された。

時には、人間の首に紐をかけてつり上げる人間すくいとして、またある時には、人間踊り食いの食料として。

しかし、人間も黙ってはいなかった。水槽の陰でひそかに科学を発達させ、巨人の胃液でも消化されない防護服を開発した。

人々はその防護服を着用し、躍り食いされた。

人々は、巨人のお腹のなかで、寄生虫ならぬ寄生人間として、暮らしたとき。

めでたし、めでたし。

ノ生存競争

私は神秘の足を持っている。

私が歩いた跡には植物が生える。

一歩、歩くごとに生命が宿っていく。

なので、砂漠などの植物があまりない場所に送られ、歩いて植物を生やす仕事をしていた。

しかし私が歩いて、生やす植物は猛毒の植物ばかりだったので、迷惑がられついに生命のいない月へと送られた。

そして、私は月で植物を生やし、月の支配者になった。

／支配者

俺は未来が見える。

これから先、何が起こるか全てわかる。

しかし、俺はただのダニ。いくら人間に未来の出来事を伝えようとしても伝わらない。

なので、未来が見えていても意味がない。

／伝えたい気持ち

今日もご飯は一人きりだ。

テーブルには母ちゃんが用意してくれた料理が見える。

今日のメニューはカレーだ。

昨日はハンバーグだった。

一昨日は肉じゃがだった。

毎日食べているのに、痩せていくばかりだ。

母ちゃんは二度と帰って来ない。

僕は母ちゃんがいつも作ってくれていた料理を想像して、今日もご飯を食べる。

目の前にはただ白いお皿が整然と置かれている。

／ひとりぼっち

ここはとある星。この星は変な名前の人が多い。

「カツ丼をお待ちのく生麦生米生たまも様、おほん。失礼」

「カツ丼をお待ちのく生むに生米生卵様、くそ。言えない」

「ちゃんと私の名前を呼んで下さいよ」生麦生米生卵は店員に抗議した。

／変な星

人間は善玉菌が増え、悪玉菌が減れば免疫力が上がり、病気になりにくい。

地球も同じ。

地球に善人が増え、悪人が減れば地球は病気になりにくくなる。

そうすれば地球は体調を崩しにくくなるかもしれない。

／詩？

魔女狩りに遭った魔女は、死ぬ前に呪いをかけた。

その呪いは、毎日昼の十二時に空から、世界のどこかになにかが降って来る呪いだ。

人々は、昼の十二時になると期待と不安を胸に抱き、空を見上げた。

空から、納豆やカレー、ミミズやナメクジなどが降って来てパニツクになる時もあるが、発展途上国などにダイヤモンドや栄養のバランスがとれた食事が降って来たという【事件】まである。

なので、今まで降って来た場所の傾向を分析して待ち構える業者まで出てきた。

そんな、混沌とした世界だったが一日だけ奇跡が起きた。

空から大量の愛が世界中の人々の心に降って来たのだ。

その日、世界から犯罪は消え人々は仲良く暮らしたとき。

／奇跡の一日

駅で中学3年の時のクラスメイトと再会した。

元クラスメイトの名前は【記憶力 世杉】だ。その名の通り、記憶力がとても良かった。

「久しぶりだなー、笑顔」世杉が言った。ちなみに私の名前は【笑顔 咲く】だ。自分で言うのもなんだが、笑顔が素敵だと思っている。

「久しぶり、世杉。元気だった？」

「うん、もう中学卒業して10年も経つもんな」

「ああ、時が経つのは早いなー。もう中学のことなんてほとんど忘れちゃったよ」

「俺は今日のことのように覚えているぜ」

「またまた、いくら記憶力が良かった世杉と言えどもそんな冗談を」

「冗談じゃねえよ。お前、7月12日の3時8分にお腹が鳴ったろ？ 理科の授業中」

「え、何言ってるの？ そんなの覚えてねえよ！」

「覚えてないの？ マジで？ じゃあ、12月6日の体育の授業中に転んで膝擦りむいて、血を流したのは覚えているだろ、流石に。9時17分だよ」

「いや、覚えてねえよ。勘弁してくれよ」

「嘘だろ。じゃあ、あれは？ あれは覚えてなきゃ、ちよつとやばいよ。1月23日の2時16分の出来事は……。国語の授業中だよ」「ちよ、ちよつと用事を思い出したわ」私は逃げるようにその場を去った。

このまま、話していると記憶の奥底で、忘れ去られたどんな恥ずかしい記憶を引っ張り出されるかわからないからだ。

私の笑顔はその日、枯れていた。

／再会

あつ、一円玉見つけた。どうしようかな、そうだ。交番に届けよう。

そんなことを考えていると見たことのないおじちゃんが見れた。

「お嬢ちゃん、その一円玉どうするつもりなの？」

「交番に届けようと思っているの」

「いい子だね」

「ところでおじちゃん誰？」

「おじちゃん？ おじちゃんはお嬢ちゃんね。いいことをしようとするとき現れる妖精の【いい子、いい子おじちゃん】だよ。

「いい子、いい子おじちゃん？」

「そう、お嬢ちゃんは一円玉を交番に届けようとしたんだよね。いい子いい子」

いい子、いい子おじちゃんはお嬢ちゃんの頭をなでなでし、その後いろいろな所をなでなでした。

§

「ママ、ただいまー」

「おかえりー、城子。どうしたの？ そんな、ニコニコして……」

「うん、今日ね一円を交番に届けようとしたら、妖精の【いい子、いい子おじちゃん】に会ったの。それでね、いいことしようとしたご褒美に、頭とか体とか、なでてくれたの」

「おのれ、痴漢め」

／不審な妖精

知らない街をぶらり旅していたら、お饅頭屋さんがあった。
建物はかなり古かった。

私は、少し躊躇したが入ってみることにした。
「いらっしやい！」声を掛けてきたのは70〜80歳ぐらいのお婆ちゃんだ。

髪は全部白髪で、顔はしわだらけ、歯もあまりないがとても愛想の良なお婆ちゃんに思えた。

お饅頭は数十種類あり、全て手作りだった。私はその中からシンブルな白い饅頭を選んだ。値段は90円だった。

「また、おいでね」お婆ちゃんが優しく言った。

店を出て、饅頭を食べながら歩いていると、『ガリツ』と何かが歯に当たった。

饅頭の中を見てみると、小さな紙が入っていて【当たり、天国行き】と書かれていた。

私はすぐにお店に戻り、お婆ちゃんに当たりの紙を見せた。

「おや、当たりかい！ おめでとう」お婆ちゃんが言った。

私は、「もう一つ、貰えるんですか？」と少し喜んで言った。

すると、お婆ちゃんが「いや、その紙に書いてある通り天国に行かせてやる」と口元を少し上げて笑って言った。

「もしかして、私を殺すつもりですか？ それともすでに、この饅頭に毒でも入っているとか……」

「ほっほっほっ。そんなことをする訳がなかるう。こっちに来ればわかる」お婆ちゃんは店の奥の襖を開けた。

襖の先は畳部屋で、白いお布団が敷いてあり、その上に枕が置いてあった。

私は、何が起きるのかとても怖く逃げ出したかったが、お婆ちゃんの声を聞いていると催眠術にでもかけられたかのように何もできずただお婆ちゃんの後を付いていくことしかできなかった。

布団の上で座るとお婆ちゃんが、私に目隠しをしてきた。もう、

蛇に睨まれたカエル状態だ。

「さあ、行くよ」お婆ちゃんの鼻息が私の首筋にかかる。

「それ、それ、それ、それー」お婆ちゃんは別人のようになった。

目が覚めた。夢だったのだろうか。いや、ここはあのお婆ちゃんの家だ。私は布団に寝ている。

「どうだったかい？ 私のスペシャル肩もみは」

「最高でした。ありがとうございます」

私は、その後もそのお饅頭屋さんでお饅頭を買っているが、今まで買った全ての饅頭に【当たり】の紙が入っていた。

お婆ちゃんの目的が寂しいからなのか、肩もみの腕を披露したいだけなのか、今の所真意は不明である。

／ぶらり旅

ポンポンーとはじけて美味しそうなポップコーンができあがった。

それらを、お皿に乗つけて塩を振る。

いきのいいポップコーンが出来上がった。

人間ポップコーンが……。

「老若男女何が出てくるかわからないから楽しいな」

ここは未来。人間以上に進化した爬虫類が人間を支配して、小さくしてポップコーンのようなものに入れて管理している。今日も進化した爬虫類達の食卓には二つとして同じ味はないポップコーンが並べられている。

／世界に一つだけの味

日常に嫌気がさしていた16歳の春男は、公園を散歩していた。

すると、魔女のような風貌のおばあちゃんがベンチに座っていた。

「なんじゃ、その疲れ切った顔は」おばあちゃんは不気味に笑って言った。

「毎日、同じことの繰り返しでもう嫌なんです」

するとおばあちゃんは「いい方法があるよ」と言った。

おばあちゃんに話によるとある場所に魂を入れ替えられる穴があるということだ。

しかし、その穴に入るともう二度と魂は元の魂と入れ替えできないし、誰の魂と入れ替わるか分からないということだ。

私は、それでも穴に入ることにした。

お婆ちゃんに教えられた場所に行き穴を見つけた。私は意を決して入った。

意識が遠のいていき、途切れ、だんだん意識がはつきりしてきて、目が覚めた。

「ぐおー、いてえ」私は周りの景色を見てみた。

ひどく薄暗い部屋で、空気は淀んでいる。なにやら生ごみのような臭いも漂っている。

「お前は、死ぬまでここで拷問を受けることになる。簡単には殺さない。俺の弟を殺した殺人鬼め。弟が受けた何倍もの苦しみを与えてやる」

どうやら、殺人鬼の魂と入れ替わったようだ。

「なんでもないような日々が幸せだったと思おう」私は歌を口ずさんだ。

/ 魂交換

流れ星が流れました。

私は願いました『毎日、髪の毛の匂いが変わりますように』

願いが叶ったのか、次の日から私の髪の毛の匂いは毎日変わりました。

甘いバニラの香り、爽やかな春の香り、うな重の香ばしい香り、下水道の臭い。

良い匂いの日は、皆が笑顔で寄って来ました。

悪い臭いの日は、皆が石や暴言を投げてきました。

でも、私は幸せでした。毎日が、ジェットコースターのようにスリリングでした。明日はどんな匂いの髪になるのかなと、ワクワク、ドキドキしていました。

私は、強い日差しが照りつけた爽やかな夏の日海へ行きました。

海で泳いでいると、背びれが見えました。

「あら、そういえば今日の髪の毛の臭いは血の臭いだったわ」
うっかりしていた私はサメに食べられました。

／ 願い事

【記憶売っています】

そんな看板のお店があったので、私は入った。

金髪で、短髪の耳や鼻や口にピアスをしている20代前半ぐらいの兄ちゃんがいた。どうやら店主のようだ。

「ここへ来るとはあなたなかなかお目が高い、さあそんな緊張しないで。いろいろと記憶が売っていますよ」

様々な人の様々な記憶が売っていた。値段はリーズナブルだ。

「あなた何か、苦手な物ややりたいことがあるかい？」店主が言った。

「格闘技がやりたいですねー」私は言った。

「じゃあ、この格闘技系の記憶から選ぶといい。ただし、何か覚えるとその分何か忘れるよ」

「どうせ、たいした記憶ないですから忘れたっていいですよ」私は言った後、空手家の記憶を選んだ。

空手家の記憶を機械で脳に埋め込んでもらった。これで、私も空

手がそこそこ使える。体は脳にまだついていけないが。
ところで私誰だっけ。私は自分のことを忘れた。

／一長一短

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5156ba/>

短編集

2012年1月14日10時47分発行